

公益社団法人
日本演劇興行協会

会報 No.64
2023 SUMMER



シアタークリエ

二〇〇七年十一月、日比谷の「芸術座」跡地にシアタークリエはオープンしました。

座席数六一一、前方席は千鳥配列、途中からスロップ席となる構造により、舞台と客席との距離が近いのが特徴です。

シアタークリエという名前が、Theatre Creationを略した造語であるように、〈創造〉から〈想像〉へ、広く沢山のお客様に楽しんでいただける作品をご提供すべく、演劇・ミュージカルからコンサートに至るまで、多彩なジャンルの作品を上演しております。



目次

理事インタビュー……………	2
二〇二二年度 助成金受賞者と授賞理由……………	7
第九回 脚本募集……………	11
舞台人 【岡本義次さん】……………	12
二〇二三年 理事会・総会議事録 報告事項……………	17

日本演劇興行協会理事インタビュー

公益財団法人都民劇場理事長 糟谷治男



——演劇の原体験を教えてくださいいただけますでしょうか。また、どのような子供時代を過ごされたのでしょうか。

父・糟谷道明が戦後、都民劇場を立ち上げ理事長まで務めておりました。私が初めて観に行った舞台も、都民劇場が共催していたニッセイ名作劇場です。一九六四年の第一回から劇団四季が制作しておりまして、都民劇場も第一回から共催して

おりました。『はだかの王様』『王様の耳はロバの耳』『イワンのばか』など、子供が楽しめる作品を上演していて、私はたしかその第二回公演くらいから観に行っていたのではないかと思います。

一九五二年から歌舞伎座で子供歌舞伎教室という催しを都民劇場がやらせていただいております。それにも子供時代、何度か行った記憶がありますね。都民劇場として財団法人を設立した時に理事になっていただいた河竹繁俊先生が、第一回から解説をしてくださっていました。その後は、私の前に理事長を務めていただいた、御子息である河竹登志夫先生にも解説をお願いしました。この子供歌舞伎教室は残念ながらコロナ禍のために、二四九回で中断しています。子供歌舞伎教室もニッセイ名作劇場も、子供の頃は親に連れられて行ったというのが正直なところで、実は観た内容までは記憶が残っていないんです(笑)。

また、これは演劇ではないのですが、子供の頃から住まいが墨田区向島にありまして、蔵前国技

館(一九八四年まで大相撲の本場所が開催されていた)があつた折、東京場所の時に呼び出しの方々が笛太鼓を持って我が家においてになって、相撲甚句を歌ってくれたのを覚えています。どちらかというとスポーツが好きで、相撲は何度か見に行きましたね。大鵬、柏戸、栃ノ海が大好きでした。

中学、高校になると、本格的にスポーツにのめり込みました。高校の時はゴルフ、大学時代はアメリカンフットボールに夢中になっていました。そんな中でも映画はちょこちょこ観に行っていました。

——その後、東宝に入社されますが、どのような経緯があつたのでしょうか。

映画を観るのは好きでしたし、父の仕事の影響もありましたので、芝居や映画という夢を売る商売というのでしょうか、次第にエンターテインメントを作る仕事に憧れを持つようになりました。

東宝への入社は一九七六年になるのですが、たしかその年は松竹の採用はなく、東宝が若干名の募集だったと思います。落ちたらアメリカへ留学しようなんて考えていたのですが、運良く採用されることになりました。ただ、演劇部に絶対行きたくないということではなくて、映画・演劇の仕事につきたいというのも漠然としたままでした。

同期には女性が数名と、男性は自分を含め五名が採用されました。ところが、東京に残る場合、男性は総務か経理の仕事だと言われたんです。どちらも自分は不得意そうだなと思い、地方に行きますと自ら手を挙げまして(笑)。それで、名古屋の映画館に配属されて、最初は名宝スカラ座に勤務して、その後名鉄東宝へ異動になりました。私が名古屋にいる時は、「人間の証明」(一九七七年)や「スター・ウォーズ」(一九七八年)の公開がありましたね。「スター・ウォーズ」はものすごい動員数でした。ヴィスコンティがあだこうだとか、ゴダールがどうだとか、皆んなで集まってそんな話をしていたのを懐かしく思い出します。

——名古屋には三年いらしたそうですが、帰京後はどのようなお仕事をされていたのでしょうか。

東京に戻ってきたら、宣伝部演劇宣伝企画室というところに配属されました。まず担当することになったのが、日劇ミュージックホールの公演です。当時ステージに立っていたのは、朱雀さぎりさん、岬マコさん、大山節子さんなどです。大山

節子さんには、時々飲み连接到行ってもらいました。その後に担当したのは、森繁久彌さんや森光子さん、山本富士子さんの舞台、高麗屋さん(現・松本白鸚)のミュージカルなどです。

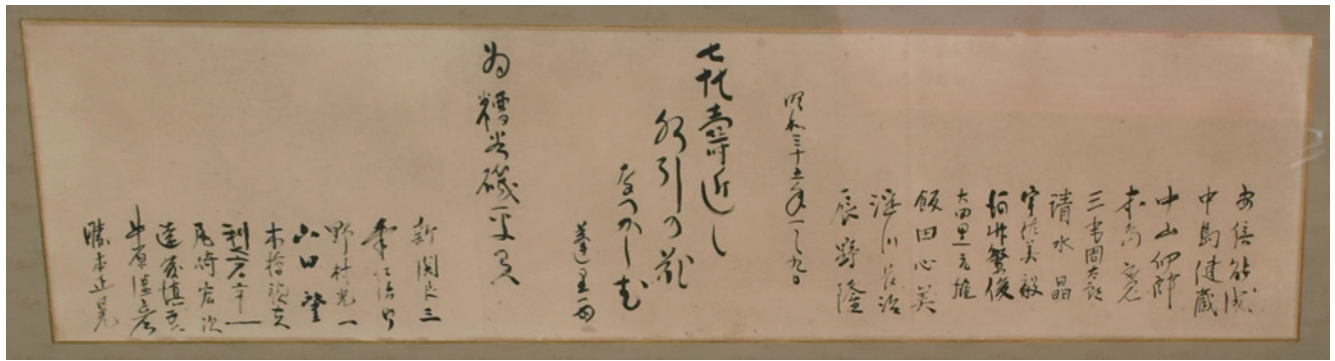
森繁さんの舞台は随分色々やらせていただきました。『屋根の上のヴァイオリン弾き』はもちろんのこと、『佐渡島多吉の生涯』、三木のり平さんと共演された『機関士ナポレオンの退職』などです。そうそう、この公演は亡くなられた夏目雅子さんの初舞台でもありました。

また、会社の近くの帝国ホテルに東京ロータリークラブがありまして、毎週水曜日になると森繁さんが見えなくなっていったんです。会合が終わる頃になると、きまって演劇制作室長と一緒にご機嫌うかがいに行っていました。メイキッス号という森繁さんが所有されていた船にもずいぶん乗せていただきました。ロータリーが十三時半に終わると、森繁さんが「じゃあちょっといいよ」とおっしゃるんです。浜離宮のところにご自分の船を停泊されていたんですよ。「まだ仕事です」と言ってみるんですけど、「いいよそんなの」と(笑)。それでそのまま船の掃除を手伝って、夕方会社に戻るなんていうこともありましたね(笑)。

ご自宅にもずいぶんうかがいました。五月四日の誕生日にお祝いをもってうかがったこともありませう。ワインを出していただいて、けっこう飲んでいただきました(笑)。豪快で面白くて、すごくチャーミングなところをお持ちで。森繁さんに



は本当にかわいがっていただきました。森光子さんは非常に気を使われる方で、それは出演者だけではなく大道具さんなどの裏方スタッフにいたるまで、公演に関わるすべての人を大切にしてくださっていました。劇場での公演が始まって森さんが楽屋に入られると、きまってみなで楽屋にうかがって色々お話をしましたね。森



祖父の喜寿の祝いに都民劇場関係の文化人から寄贈された額

さんや森繁さんの一座には、まるでファミリーのような雰囲気がありました。

——様々な歴史的な作品の制作過程を間近で見られてきたと思いますが、なかでも印象深い公演はございますか。

記憶に残っているのは『レ・ミゼラブル』の初演（一九八七年）を担当したことです。『レミゼ』は初めて東宝がオーディション形式で上演することになり、その準備にも一年以上かけ、チラシを作るだけでも大変でした。滝田栄さんと鹿賀丈史さんがジャン・バルジャンとジャベールを二役を演じられて、斉藤由貴さんが初舞台でコゼットを、岩崎宏美さんのファンテーヌに野口五郎さんのマリウス……とても懐かしいですね。

日本公演の前には、私も当時の電通の担当者としてロンドンに行って、パレスシアターで『レミゼ』を観劇してきました。その後で、キャメロン・マツキントッシュ氏とランチをさせていただいたのは貴重な経験でした。そして帰国後すぐに日本公演の記者会見をやるというので、キャメロン社の事務所に行ってカセットテープを二百本くらいもらってきたんです。会見でマスコミに配布するための、楽曲の入ったパブリシティ用テープです。ところが、それを持って空港の税関を通ろうとしたら引っかけられてしまいました。通してもらおうのに一時間くらいかけて説明して、大変だった記憶があります（笑）。

高麗屋さんの『ラ・マンチャの男』も印象深い作品です。今年四月によこすか芸術劇場でラスト公演をされましたが、私は二〇二二年二月日生劇場での公演を拝見することができました。これだけ長く続けてこられたことは本当に素晴らしいの一言に尽きます。

——東宝での仕事はどれくらい続けられたのでしょうか。

一二、三年でしょうか。宣伝の仕事は、ある程度自由に色々やらせていただけでしたが、貴重な経験を重ねることができたと思っています。そしてその後、都民劇場の仕事に携わることになります。都民劇場は一九四六年四月二七日が創立記念日なのですが、その誕生の経緯を簡単に申し上げますと、東京都教育局におりました父が、同僚の中野ツヤさんと二人で、敗戦の後の焼け野原の東京に文化の火を灯そうということで立ち上げたのがきっかけです。久保田万太郎さんや安倍能成さんといった文化人の方々を訪ねてお名前を連ねていただいたと聞いています。

当初は、オペラや能の公演の制作をしていました。戦後初の文楽の東京公演（一九四七年）も行っています。歌舞伎座が再建する時（一九五一年完成）も、戦後すぐで資材が乏しかったため、東京都に働きかけて協力をしたり、東京文化会館の設立（一九六一年完成）にも尽力しました。そして、一九五五年四月一五日に財団法人として独立しま

した。最初の頃から公演をするだけでなく観客を募る活動も同時に行っており、そちらの方だけを独立させまして、以降、鑑賞組織として今日まで続いています。

二〇一一年には新たな公益財団法人となり、現在は、鑑賞組織と青少年の育成、古典芸能の保護を事業内容としております。鑑賞組織としては、演劇・歌舞伎・新劇・音楽のサークルがありまして、それぞれで会員を募り、幅広い都民を対象に少しお安いお値段で観劇していただけるようにしています。これは本当に、松竹、東宝、明治座などの製作会社、多数の劇団、クラシックスの音楽事務所など、各方面にご協力いただくことで実現していることです。コアな客層ではなく、お芝居に直接触れたことのない都民の方にも幅広くその機会を提供したいと思っています。

育成の部門では、歌舞伎座に於いて子供歌舞伎教室という形でお手伝いさせていただいております。子供たちが芝居を観る機会を作るとは、ひいては未来の観客を育てるということに繋がりますので、とても大切な事業だと思っております。

また、古典芸能の保護事業としても様々な取り組みをしております。能公演は年に二回ほど各自流派の公演を行っております。中国の演劇にも力を入れていきます。京劇フェスティバルという形で、最近だと三国志の曹操役で有名な中国国家京劇院の袁世海さんをお呼びして公演を行いました。

都民劇場創立45周年の折には、上海昆劇団をお

呼びしました。昆劇は六百年以上の歴史を持ち、ユネスコ世界無形文化遺産にも指定されている中国の伝統演劇で、演劇の世界三大ルートとも言われています。京劇より静かでしたおやかな雰囲気があつて、京劇が歌舞伎なら昆劇は能のような感じでしょうか。日本でも坂東玉三郎さんが昆劇に取り組んでいらつしましたよね。都民劇場では上海昆劇団の方をお呼びして、何本か上演を行いました。その後も、上海昆劇団と北京昆劇団の合同で木下順二先生の『夕鶴』を昆劇用に改訂、日本で初演したこともございます。

『夕鶴』と言えば、財団の理事も務めていた團伊玖磨さんが作曲されたオペラ『夕鶴』の、その五百回記念として都民劇場で新しいバージョンを制作していました。衣裳や装置などを一新して上演し、好評をいただきました。

貴協会と共催している「都民半額観劇会」の始まりは、一九九三年十月が第一回です。この前年に東京都が「都民文化栄誉章」を設立し、第一回の受賞者が森繁さんで、十月の都民の日に併せて帝劇で上演中の「孤愁の岸」と、歌舞伎座公演の二劇場からスタートしました。当初の入場券の引き換えは、当時旧数寄屋橋ビルの一階にあつた都民劇場の事務局で行ないました。各劇場の営業の皆さまにお集まり頂き、早朝からおお客様の整理と入場券の引き換えをしました。

お昼に皆様とお弁当を食べながら芝居談義に花を咲かせたのも懐かしい記憶です。



それから三十年、約一三〇万人のお客様がこの都民半額観劇会をご利用頂きお芝居をご覧いただいております。

演劇人口の裾野を広げる事に貢献出来ていることを嬉しく思っております。

——二〇二〇年以降のコロナ禍の影響はいかがでしたでしょうか。

コロナ禍で一番困ったのは、都民劇場の会員の方は年配の方が多いものですから、観劇を控える方が多くなったことです。ご友人同士でいらつしやる方も多かったので、お一人がいらつしやるよりももうお一人もという状況で、大変厳しい時期が続きました。音楽サークルは特に打撃を受けまして、海外のものが主だったため公演自体が叶わ



ず、現在、無期限休止となっております。演劇に関しては、最近ようやく遠方の会員の方も戻ってきています。まだ時間はかかるかもしれませんが、少しずつ以前のように会員の皆さんに楽しんでいただけるようになればと思っています。

——都民劇場の事業を続けていく中で、大切にしていることはございますでしょうか。

私どもで制作する公演もいくつかはございますが、主なものが鑑賞事業になります。先ほども申し上げたように、各団体からの大切な切符を私どもは預からせていただいている立場です。都民劇場は観劇人口を増やすための公益財団法人であるということ、通常より安く切符を提供している点、信頼関係あつてのもの。その継続にも、やはり変わらぬ誠実さが最も重要なことだと考えております。多くの演劇ファンを作りたいという思いを今後も大切にしながら事業を続けていきたいと思っております。また、コロナ禍で改めて気付かされたことは、健康が一番だということ。都民劇場の職員にも、コロナ禍における公演中止になった際の対応をはじめ、多大な負担をかけていたと思います。とにかく健康第一に仕事をしてほしいと願っています。

——都民劇場の今後の展開をどのようにお考えでしょうか。

人生百年時代と言われるようになりましたが、劇場にはまだまだ男性のお客様は少ない状況です。三・四月に上演された『新作歌舞伎ファイナルファンタジーX』は、原作の影響か男性の姿も多くお見かけしました。都民劇場の会員にはご年配の女性の方が多いので、ぜひ旦那様を誘っていただいて、一緒に観ていただくようになったらいいなと思っています。外出の機会が増えることは健康の面からいいのではないかと考えていますので、より幅広くより多くの鑑賞機会をご提供できるよう、今後も尽力していきたいと思っています。

(取材・文／高橋涼子)

■プロフィール

かすや はるお／一九五四年 東京都出身

一九七六年 学習院大学経済学部卒業。

同 年 東宝株式会社入社。

一九八八年 公益財団法人都民劇場採用。

二〇一三年 理事長就任。現在に至る

(公社) 日本演劇協会 専務理事

(公社) 国際演劇協会日本センター 理事

(一財) 日本中国文化交流協会 顧問

(一社) 我孫子ゴルフ倶楽部

常務理事・キャプテン



二二年度

助成金受賞者と授賞理由

金子 良次 殿



一九四七年八月生まれ 七五歳

脚本、演出家

授賞理由

一九七二年劇団前進座演出部に入団。舞台の裏方としての基礎を身に付けた。劇団前進座退団後、株式会社亀屋東西社を設立。脚本家、演出家として長きに亘り商業演劇に携わり、特に歌手や俳優の座長芝居にはなくてはならない存在となる。舞台監督や演出家の人材育成にも注力し多くの演劇人を育てている。金子氏の功績と今後更なる活躍を期待しての受賞。

受賞のことば

商業演劇の世界で仕事をしてきたスタッフの一人として、日本演劇興行協会の目にとめていただいたことを大変うれしく思っています。体調のこともあり、そろそろリタイアかなと思っていたところへ受賞の知らせを受けた時には、私よりも受賞に相応しい方々がたくさんおられると思います。友人から「芝居をやめるなんて言うな!」とくどく言われたこともあり、この受賞を機会に体力の続くあいだはやっていこうと、考えをあらためました。劇団前進座演出部にいた頃は、主に近松や鶴屋南北の歌舞伎公演の舞台監督や演出助手が多かったのですが、親子劇場向けの芝居や学校公演では全国巡演にも行きました。初演出は榊原政常作「未摘花」、それから若林一郎作「田能久」、新美南吉原作・筒井敬介脚本「花の木村と盗人達」など、学校公演向け作品を演出。劇団前進座を退団し、仲間と共に鶴屋南北をもじった亀屋東西社というスタッフ会社をつくった当初は、商業劇場の仕事依頼があったわけではなく、私は主に日本

舞踊のおさらい会の仕事をしていました。劇団で柝や付けを打っていたことが役に立ちました。その後バレエの舞台監督助手の依頼があり、子供バレエ発表会の舞台監督も数多く経験。また地人会から台本・演出を依頼され「風の如くに」という松山政路さんの一人芝居を手がけました。

丁度その頃、商業劇場でも舞台監督や演出助手をやる人が不足していたのか、亀屋東西社にスタッフ派遣の依頼がくるようになりました。私は田中林輔先生、土橋成男先生、木村光一先生、ジェームス三木先生、増見利清先生など多くの先生方の演出補を勤めているうちに、演出の依頼をいただくようになり現在に至ります。先生方の戯曲を立体化する視点は学ぶことが多く、また人間を洞察する力は深くとても勉強になりました。振り返って見ると芝居作りの仕事は人とのつながり、縁が大きく影響します。その点で私は俳優やスタッフとの幸運な出会いがこの世界でやってこれた理由だと思っています。

坂入 清子 殿



一九四四年四月生まれ 七八歳

劇団新派 結髪
授賞理由

一九六六年劇団新派結髪部に入団。以降劇団新派の結髪を担当。戯曲に描かれた時代や地域の人物の状況、心情など色々な生き様を、結髪によってリアリティーを持たせる重要な役割を担う。特に明治・大正・昭和の時代の髪形においては、坂入氏の知識、経験、優れた技術により、的確に表現する唯一無二の存在である。坂入氏のこれまでの功績を高く評価し、今後更なる活躍を期待しての受賞。

受賞のことば

このたびは身に余る助成金を賜りまして、誠にありがとうございます。

六年間美容院で美容師として技術を磨き、昭和四十一年、劇団新派に結髪として入り、現在にいたります。新派の現場で初めて網のついたカツラ

を扱うことになりました。床山さんは油を付ける方法で、私は油を付けずに結び上げる方法でしたので、劇団の中に新たに結髪部が誕生しました。昭和四十四年頃からは、ザンギリ頭をセツトするようになりました。ザンギリに私が手を加えると、形が良くなったと、多くの男優さんから喜ばれ、そのうちザンギリは全部私が担当するようになりました。

同じ頃、北條秀司先生の書下ろしで『女優』と云うお芝居を夜の部一本立てで上演した時は、水谷良重(現二代目八重子)さんが、自毛を伸ばしておられたので、衣裳を替えながら、全カツラ、半カツラ、部分カツラを使って自毛を結び上げました。これがとても楽しく、やめられなくなりました。今日まで自分の仕事を頑固なまでに貫いてまいりましたが、ここまでこられたのも、その時の水谷さんのおかげと感謝しております。



高見 和義 殿



一九六一年二月生まれ 六一歳

照明デザイナー

授賞理由

一九八二年舞台製作会社クリエイティブ・アーツインク社に入社。林光政氏、原田保氏に師事、多くの研鑽を重ねた。二〇〇〇年に「アンナ・カレニナ」、二〇〇二年には「ピッチフォーク・デイズニー」作品で幾多の演劇賞を受賞。その後も余念のない研究、努力を続ける姿勢は舞台製作者や演出家からの高い信頼を得る。氏を慕う後輩、若手スタッフは数多く、更なる指導育成に期待する。高見氏の今後より一層の活躍を期待しての受賞。

受賞のことば

この度は日本演劇興行協会の助成事業に選定され、大変嬉しく思っております。一九八二年にクリエイティブ・アーツ・インクへ入社し舞台照明の世界に入り四〇年以上が過ぎました。多くの素

晴らしい皆さまと出会う機会に恵まれ現在に至る事が出来ました。感謝してもしきれません。

特にその中で感謝させて頂きたいお二人の照明家を上げてさせて頂きます、お一方は林光政さん、もうお一方は原田保さんです。お二方からは舞台の世界での決まり事や照明が表現すべき考え方を御教授頂き、それらが私にとっての原点となっています。林光政さんが作るダイナミックかつ精密な照明、原田保さんが作る論理に対して鋭く切り込む照明は、今でも到底及びませんが、私が照明デザイナーを考える上での基礎となっています。

舞台照明の世界は一九八〇年代からのムービングライトの出現、二〇〇〇年代に入ってからLED機材の進歩、それに伴うシステムの複雑化など、めざましいスピードで進化しています。簡単に比較出来ませんが、その演出効果は私が仕事を始めた頃の十倍以上になっていると感じています。このように多種多様に表現する事が可能になった舞台照明ですが、過剰な使用はマイナス効果をもたらし、あくまでも演出に沿った表現を行わなければならぬと、常日頃意識しています。

また新型コロナウイルス感染症の影響は舞台の世界への影響も多大で、先が見えない不安な毎日を経験しました。そこから丸三年が過ぎ、少しずつ公演が再開出来るようになった今、私を感じる事は仕事ができる喜びです。照明デザインを行うひとつひとつの公演を大切に、自身が感じた表現を行い、丁寧に取り組んでいきたいと思いま

す。それが今までお世話になった皆さまや、この業界に対する恩返しとなればと思っております。今後も新たな気持ちで精進して参りますのでご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



岡本 義次 殿



一九四八年二月生まれ 七四歳
プロデューサー

授賞理由

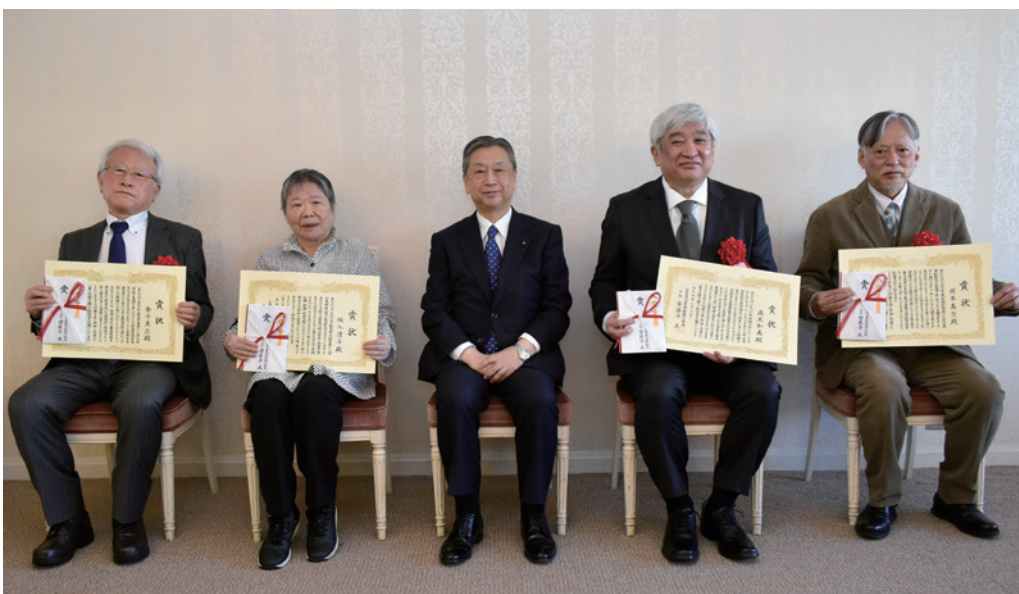
一九七二年東宝演劇部に入社。蜷川幸雄演出作品で演出助手等のキャリアを積みプロデューサーの道を歩む。俳優、スタッフの要望を的確に把握したうえで、実現性を図りつつ最大限の舞台成果を目指す製作姿勢は、演劇関係者から厚い信頼を得ている。氏の下で育ったクリエイターや俳優は数多く、氏の功績が業界に与えた影響は計り知れない。岡本氏のこれまでの功績を高く評価し今後更なる活躍を期待しての受賞。

受賞のことば

この度は日本演劇興行協会助成金受賞者に選考を頂き、誠にありがとうございました。いつもでしたら、会社の方から「今度の日本演劇興行協会の助成金受賞者に○○さんを推挙しようと思いません」と告げられ「それは是非、お願いします」と常

日頃から仕事を一緒にやってきた仲間のスタッフの授賞を共に喜んでおりました。プロデューサーとはよく言われる様に「縁の下の力持ち」であります。自分が声をかけて集まって来てくれたキャスト、スタッフがより良い舞台を創るため其々の最大限の力を発揮出来る様に尽力する、それがプロデューサーの仕事だと思っています。ですので、その結果として俳優やスタッフが評価されることがあるとしたら何よりの喜びです。と、思っていたところに今回は自分の名前が受賞候補者に上がり、「それはありなのか？」と気恥ずかしいとも後ろめたいとも思う感情が沸き上がりました。以前の受賞者名簿を見せて頂くと、確かに諸先輩方のお名前も並んでおります。皆様、輝かしい業績をお持ちの方々ですので、今度は「私でいいのか？」となりました。授賞理由を訊くと「それは長年の功績でしょう」と返事がきます。確かに「功績」は兎も角、「長年」であることに間違いはありません。大学卒業と同時に、当時菊田一夫先生率いる東宝演劇部に演出部として入社しました。以来、演出部として一五年、プロデューサーとして三七年を舞台制作の現場で過ごして来ました。自分でも驚きの五二年の歳月が流れました。その間、本当に多くの舞台を、才能あるスタッフ、俳優と共に創って来ました。今、思い返してみても、素敵な演劇人たちと出会ったことが、私がここに辿り着いた一番の要因です。演劇はチームワークの芸術と言います。ならば、劇場で出会った多くの人々、

一人ひとり名前を挙げれば限がありませんが、その人たちの支えがあつてこそこの現在だと思っております。今回の授賞にあたって感謝の言葉を述べるのであれば、私が出会い「演劇への愛、劇場への愛」を共に抱いた仲間たちに「ありがとう！」と伝えたいと思います。



第九回

脚本募集



賞

最優秀作 1作品 100万円
優秀作品 2作品 各50万円
佳作 若干 各20万円

募集締切

2023年11月30日必着

■入選発表

2024年年末頃予定

- ・入選者には、直接連絡いたします。
- ・選考結果は、当協会ホームページ上にて発表いたします。

URL <http://www.enkokyo.or.jp/>

■選考

当協会が依頼した選考委員が選考にあたります。

■留意事項

- ・入選作の上演権・著作権は、入選発表の日から5年間、公益社団法人日本演劇興行協会が保有します。
- ・応募作品は、一切返却いたしません。
あらかじめコピーをとっておいて下さい。
- ・選考に関する問い合わせには応じられません。
- ・応募者から取得いたしました個人情報は本募集の目的以外には利用いたしません。
- ・履歴詐称等の不正行為が判明した場合には、入選を取り消します。
- ・事務手数料は必要ありません。

■加盟劇場(50音順)

東京/歌舞伎座、シアタークリエ、新橋演舞場、帝国劇場、明治座
名古屋/御園座 京都/南座 大阪/大阪松竹座、新歌舞伎座 福岡/博多座

脚本家養成講座 受講生随時募集中

■ご応募/お問い合わせ先

公益社団法人 日本演劇興行協会

〒104-0061 東京都中央区銀座1-27-8セントラルビル
TEL.(03)3561-3977 (平日10:00~18:00)

脚本募集 応募要旨

■部門

- 歌舞伎 ●時代劇 ●現代劇 ●ミュージカル

■応募資格

不問

■原稿枚数

100枚以内(400字詰め原稿用紙)

■応募規定

- 日本語によるオリジナルの未発表・未上演の作品。
脚色は不可。
- 参考資料、引用については末尾に明記のこと。
後日、応募作品について問題(第三者によるクレーム)が発生した場合は応募者の対応となります。

■応募方法(原稿形式・必要記載事項・注意事項)

- ①表紙(2部)……………応募部門名とタイトル
- ②あらすじ(2部)……800字以内
- ③脚本(2部)
 - 手書きの場合は、市販の400字詰め原稿用紙使用。
 - パソコン・ワープロ原稿の場合は、A4サイズに20字×20行(縦書)。
 - ページ番号をつける。
- ④別紙(1部)
 - 応募部門名、住所、氏名(筆名の場合は本名も)、年齢、性別、電話番号、メールアドレスを記載。

上記①~③を1部ずつ順に重ね、ダブルクリップまたは紐でとめたものを必ず2部(1部はコピー可)送付する。

④の別紙は、1部のみ。

応募作品は、書留郵便または宅配便にて期間内必着で送付して下さい。(持参不可)

トの「ゴドーを待ちながら」。それが、僕が初めて読んだ戯曲でした。

——その後、早稲田の文学部に入学されますね。

大学時代に大きなカルチャーショックを二度受けるんです。一度目は入学してすぐ。広島出身の僕にとって、東京の同級生たちがものすごく早熟に映って。現代フランス文学だとか、僕の知らないような本を読んでいるんですよ。なかには、当時、和訳本が手に入らなかったブルーストの「失われた時を求めて」を原書で読んでいるような同級生もいたりしてね。彼らが語る文学や美術についての様々な芸術論はすごく刺激的でした。

文学部では三年目で専門が分かれるのですが、僕は演劇を専攻しました。といっても自分で演劇をやろうと思ったわけではなく、テレビドラマの制作に関心があったんです。当時、テレビ局の優秀なディレクターたちが独立して秀作を作るようになっていて、職業としてひとつの選択肢かなと漠然と思っていました。

この演劇を専攻したことが第二のカルチャーショックで、そこにいる連中というのがこれまたすごいですよ。当時は大学紛争の真っ只中でほとんど授業がなかったもので、自分たちで自主研究会を作って、毎週それぞれがテーマを決めて発表するんです。たとえば映画を体系的に捉えた発表があったりだとか、毎週話を聞くのが楽しみでした。演劇もよく観に行くようになりました。世の中

はちょうど第一次小劇場ブームで、アングラ演劇がさかんに上演されていた時代。大学近くの喫茶店に行くと鈴木忠志さんの早稲田小劇場が芝居を上演していて、渋谷では寺山修司さんの天井棧敷、新宿では唐十郎さんの状況劇場がテント芝居をしていたり。芝居を観て学ぶというか、本当に面白



い時代だったと思います。学校の授業では国立劇場で三島由紀夫演出の『椿説弓張月』を観たり、卒業論では三島由紀夫の戯曲論を書いたけれど、とにかく何よりもその仲間たちと過ごした二年間で、自分の感性や知識は鍛えられたと思っています。

蜷川幸雄さんの出会い

——大学卒業後、東宝に入社されることになった経緯は。

学生時代にアルバイトをしていた喫茶店のオーナーが、俳優の宮口精二さんの知り合いだったんです。宮口さんは当時東宝の舞台によく出演されていて、そういった方向に行きたいのなら紹介してあげると言われて、帝劇の楽屋に会いに行きました。その時に宮口さんはご自身で刊行する「俳優館」という小雑誌の話をしてくれて、帰りには一緒に当時帝劇にあった食堂でご飯をご馳走してくれました。それがすごく美味しかったですよ。学生なんてろくなもの食べてないですから、ここに来たら美味しいご飯が食べられるぞと(笑)。

次は宮口さんが芸術座に出演した時に楽屋をお訪ねして、プロデューサーに引き合わせてもらい、履歴書を渡しました。それが大学四年の夏で、その後入社試験を経て演劇部に採用されることになりました。その時、普通に働くのなら大学卒業後の翌年四月一日からだけど、大学の勉強に影響がないのなら、十月一日からこないかと言われて、

そうすることにしたんです。

演劇部での仕事は演出部だと言われていたのですが、それまで大学の仲間たちがする芝居の手伝いはしたことがあっても、舞台のことをよくわかってはいませんでした。一番下っ端で色々なことをやらされるんだろうな、くらいのものです。

言われた通りに十月一日に演劇部に行くと、研修で東京宝塚劇場に二ヶ月行つてくださいということになって。ちょうど劇場では森繁久彌さんと山田五十鈴さんの公演の舞台稽古中で、プロデューサーに挨拶したら「とりあえず今日は客席で見てください」と。ところが終電近くになって終わらないんですよ。心配になって「電車がなくなるんですけど何時頃終わるんですか」と聞いたら、「終わる時が終わる時だよ」って(笑)。結局、終わったのは深夜二時過ぎ。劇場を出るとブラツとタクシーが待っていて、方面が同じ人と乗合いで帰るんです。仕事始めの日からとにかく印象的でした。

演出部の下積み時代はハードでしたけれど、先輩方はみな優しくかったですね。千穂楽の翌日が次の公演の仕込み日で休館日なんて無い時代でしたから、最初の十二ヶ月は休みなく働きながら、毎日終電まで先輩たちとお酒を飲むか麻雀をするかという日々。「仕事は現場と酒場で覚えろ」とか言われた乱暴な時代でしたが、正しかったかも(笑)。でも、そんな生活が続くと、いったい何をしてるんだろうかと、時々不安になることがあって……

(笑)、毎朝、劇場へ向かう電車の中で、新聞の就職欄を見たりしてましたね(笑)。先輩たちと遊びながら本も読んでいたし映画や芝居も観続けていました。今思うとよく時間があつたなと思います。

——演出部時代で印象的な出来事はございますか。

演出部に入つて三年くらい経つた頃、蜷川幸雄さんと出会うんです。学生時代から大学の先輩でもあつた清水邦夫さんの戯曲が好きで、清水さんの芝居があれば出向いていて。なので、清水さんと蜷川さんが一九六八年に旗揚げした現代人劇場も毎回観に行っていました。その頃、新劇の演出家の方たちは東宝でも演出を手がけていましたが、まさか小劇場で活躍している蜷川さんが、東宝で演出をするとは思っていませんでした。それが『ロミオとジュリエット』(一九七四年、日生劇場)です。この話が決まつてすぐに、プロデューサーに「ぜひ参加させてください」と自ら手を挙げました。以降、十数年にわたつて、蜷川さんが東宝で演出する際には演出助手を務めることになりました。

蜷川さんとは帰る電車の方向が一緒だったので、車中でも色々な話をしてくれました。ある時、僕が「演劇をやるってどういうことなんでしょうか」と言ったら、「俺たちは演劇という回路を使って世界と繋がっていくんだよ」と。いかにも「蜷川幸雄ですよ(笑)。そうやって断定的にものを言う時の蜷川さんの言葉には納得させられるだけの強さ、



真実がありました。実際に仕事をしていると、演劇の力で世界と繋がつてると思わせてくれたし、本当に楽しかったですね。

様々な才能に困まれて

——その後、プロデューサーという立場になられますね。

会社から打診があつたんです。演出部を十五年、そのうち蜷川さんの演出助手を十年続けて、気づくと三十七歳。もう新聞の就職欄を見ている場合ではない年齢になっていましたね。プロデュー



サーになることには迷いもあつたし、蜷川さんと別れるのも辛かった。けれど、蜷川さんが「またいつかプロデューサーとして一緒に仕事すればいいじゃないか」と言ってくれて。その機会は結局訪れなかったのですが、この場所で演劇を続けていこうと思わせてくれたのは、やっぱり蜷川さんなんです。

——プロデューサーになられて三十年以上になりますが、本当に多彩な作品を手掛けられています。転機となるような出会いを教えてください。

プロデューサーになつてすぐ、日本演劇興行協会から奨学金をいただいて研修でロンドンに行つたんです。ナショナルシアターの芝居や、『オペラ

座の怪人』『レ・ミゼラブル』などの大型ミュージカルを観劇して。その時に、自分が知っているのは小さな世界だけで、まだまだすごいものが世界にはあるんだと思ひ知らされました。その経験を経てプロデューサー・チームの一員として参加した『ミス・サイゴン』(一九九二年四月開幕、帝国劇場)は、海外の演出家やスタッフと仕事をし、また一年半のロングランというのもすごくいい勉強になりました。

また、自身が初めてプロデューサーを務めた『から騒ぎ』(一九九〇年、日生劇場)で、野田秀樹さんという才能にも出会いました。全部で野田さんの作品は三作品に携わりましたが、今までは違うスタイルで作品を創り上げていく演出を間近で見ることができたのは非常にいい経験になりました。

俳優でいうなら、森光子さんの仕事も忘れられません。演出部の頃からずっと一緒にいたのですが、プロデューサーとして指名して下さって上演したのが『恋風・昭和ブギウギ物語』(一九九三年、芸術座)。演出家も若い方という森さんの希望があり、お互い助手時代から付き合いのあつた栗山民也さんをお願いしました。そこから、栗山さん演出・森さん主演の作品が続いていくことになりました。その後、『放浪記』のプロデューサーも務めるようになるのですが、森さんには「あなたとは馬が合うから」と、随分かわいがつてもらいました。

俳優仲間たちが言うには、「杉村春子さんの芝居

は袖で見ていると勉強になるけれど、森さんの芝居は見ても勉強にならない。なぜなら、真似ができないし、あれは森さん一代のもので学べるものではない」とよく共演されていた山岡久さんも、「森さんと芝居するのは楽しい。どんなふうによつても全部受けてくださる」とおっしゃっていました。それは舞台に立つてみないとわからないことですから、一度自分も役者になって森さんと芝居をやってみたかったなあと思います。それをある時、森さんに話したら鼻で笑われましたけど…。

——二〇〇〇年に帝劇で初演された東宝版のミュージカル『エリザベート』をはじめ、ウィーン発のミュージカルはいまも再演を繰り返されていますね。

『エリザベート』や『モーツァルト!』(二〇〇二年初演、帝国劇場)といった作品、そして小池修一郎さんという才能との出会いも大きかったですね。帝劇という大きな空間で上演する、大勢のお客様に観ていただくエンターテインメントとは何なのかを、改めて考えるきっかけになりました。僕は演出部にいた十五年の間、ミュージカルには一本も携わっていないんです。もちろん今ほどミュージカル自体が少なかったし、僕がプロデューサーになる頃は、ちょうど東宝が大きくミュージカルに舵を切った時期だったとはいえ、まさか三十年経って自分がミュージカルばかりやることになるとは思ってもみませんでした。

ですから最初にお話ししたように、本当に少しずつ高校から大学そして、東宝に入社してからも様々な出会いを経て、段々と緩やかに今のこの道に寄ってきたということなんです。真っ直ぐでもなくかといつて大きく曲がることはなく、気がつけば東宝で働き始めて50年経っていた。人生って面白いですよ。

プロデューサーとしての想い

——プロデューサーを目指す方や若いプロデューサーに、これだけは心に留めてほしいということはどう思いますか。

まずは、すべてに愛情を持つことでしょうか。どうしても若い頃は突出したがるし、自分の我を張ってしまうのしょうがないことです。僕も若い頃はトンがっていたと思いますよ。蛭川さんはパーティーや何かで僕のことを紹介する時に、「東宝の岡本です。今はプロデューサーをやっています。ですが、若い頃は僕の生意気な演出助手でした」って必ず言っていましたからね。それを聞いて、そうか俺って生意気だったのかと(笑)。確かに、蛭川さんに「ここは違うと思うのですが」とか平気で言ってたなああって(笑)。でもそれは、なんでも言えと蛭川さんがおっしゃっていたからなんですけれど、若気の至りですね。でもそういう傲慢さは若者の特権でもあるし、若い頃から丸くなりすぎてもとは思いません。ただ、バイトをしながら続

けている若い役者や、舞台スタッフ、切符を売る営業の裏方たちだってみんな、演劇が好きで集まった人たちじゃないですか。そういった同じ志の人たちに対して、常に優しさを持って向き合っていけたらいいのではないかと思います。

——プロデューサーとしての信念を教えてください。

自分は常に先発完投型のプロデューサーになろうと思つてやってきました。つまり稽古場から劇場、初日が開けたら地方公演の千種楽まで、何があっても全部現場にいるようにしているんです。『ミス・サイゴン』なんて一年半やつていて出演者も多いですから、途中からプロデューサーというよりもプロダクションマネージャーのようになっていましたね。初日が開いてトラブルさえなければ、みなのかえをするのが自分の仕事だと思つていて。それこそ出演者の冠婚葬祭に関する手配だったり、困ったことがあったら相談にのったり。常に劇場にいて、俳優たちは安心するし信頼もしてくれる。舞台上で僕は何もできないのだから、せめてね。

——長い演劇人生の中でも、コロナ禍の三年間は大変で苦労されたのではないかと思います。

まさかこんなことが起こるとは思いませんでしたよ。現場は本当に辛かったです。様々な状況に精一杯対応していましたが、稽古も本番も気の抜けない日々でした。今後も状況を見極め

ながら進めていくしかありませんが、チケットを握りしめて楽しみに待っていてくれるお客様がいるのですから、とにかく僕らは愛情をもって作品を作り続けていくしかありませんね。

取材・文／高橋涼子

■プロフィール

おかもと よしつぐ

東宝演劇部・プロデューサー

一九四八年二月、千葉県市川市出身。父親の仕事の関係で高校時代を広島市で過ごす。

早稲田大学第一文学部演劇科卒業と同時に、菊田一夫氏率いる東宝演劇部に演出部として入社。主に蛭川幸雄氏等の演出助手を長年務めた後、プロデューサーに転ずる。

プロデューサーとしての主な担当作品に日本初演「ミス・サイゴン」、「野田秀樹のシェイクスピアシリーズ」、「放浪記」等の森光子主演作品、「エリザベート」「モーツァルト！」等のウィーンミュージカルシリーズ等がある。

二〇二三年 理事会・総会議事録 報告事項

公益社団法人日本演劇興行協会の総会、理事会を書面及び対面で開催しました。

理事会議事録

一. 日時 二〇二三年二月一日(水)午後二時

二. 場所 東京プリンスホテル

三. 議決権のある当法人理事総数 一三名

出席理事 一〇名

安孫子 正、池田 篤郎、山根 成之、宮崎 敏明

三田 芳裕、松村 隆志、貞刈 厚仁、松田 和彦、

葛西 聖司、古井戸 秀夫、

欠席理事 三名

糟谷 治男、堤 雅史、曾田 修司

出席監事 二名

迫本 栄二、安藤 知史

事務局 一名

吉浦 高志、小金平 惠津子

四. 議長 会長 安孫子 正

五. 開会

定刻に至り、吉浦事務局長が本日の理事会は定款第三四条の定足数を満たし、適法に成立した旨を告げた。議長は定款第三三条二により安孫子正会長が務めた。理事会議事は、一般社団法人及び

一般財団法人に関する法律第九五条三項の規定に従って作成することになった。

六. 議事の経過の要領及び結果

【決議事項】

第一号議案 公益社団法人日本演劇興行協会定款

改定について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から公益社団法人日本演劇興行協会の定款改定についての説明を行った。

次いで、議長が本案件の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第二号議案 二〇二三年度事業計画案、資金調達

及び設備投資の見込みについて

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二三年度事業計画案、資金調達及び設備投資の見込みについての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

第三号議案 二〇二三年度予算案について

議長から本議案について付議し、これを受けて

吉浦事務局長から二〇二三年度予算案についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第四号議案 二〇二二年決議の省略の方法による社員総会招集について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二二年社員総会招集を定款一八条の決議の省略の方法により行うべく招集する件についての説明を行った。次いで、議長が

本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

次に会長より常務理事の業務執行体制の報告が

あり、池田常務理事、山根常務理事、宮崎常務理事の業務執行確認と各常務理事の業務執行報告がなされた。次に事務局より経理規程第十二条、第二十一条、第二十九条、第三十二条、第三十四条。会費規程第二条、公印取り扱い規則の別紙、海外研修助成に関する規則の改定についての報告がなされた。

次に二〇二一年度に決議された二〇二一年度補正予算文化庁のアートキャラバン事業の事業完了

報告、JASRACとの規定改定協議の状況、チケット不正転売禁止法の状況報告、協会発行観劇券の協力要請、劇場支配人を委員とする委員会の活動報告、文化芸術推進フォーラムの活動報告、アート&ライブシテイ構想実行委員会の活動報告を行った。

七. 閉 会

議長は全議案の審議と報告事項が終了した旨を告げ、午後二時三五分閉会を宣した。

定時社員総会議事録

定時社員総会の決議があつたものとみなされた日

二〇二三年三月一日

定時社員総会の決議があつたものとみなされた事項の提案者

代表理事 安孫子 正

議事録の作成に係る職務を行った代表理事及び

理事

代表理事 安孫子 正

理事 池田 篤郎

議決権を行使することのできる社員の総数

一四名

決議を省略する議案

第一号議案 公益社団法人日本演劇興行協会定款

改定について

第二号議案 二〇二三年度事業計画案、資金調達

及び設備投資の見込みについて

第三号議案 二〇二三年度 予算案について

第四号議案 議事録署名人選任について

代表理事安孫子正及び理事池田篤郎を議事録署名人とする件

署名人とする件

二〇二三年二月一五日の理事会の決議に基づき、代表理事安孫子正が社員全員に対して定時社員総会の目的である上記事項について提案書を発し、当該提案につき、二〇二三年三月一日までに社員の全員から書面による同意の意思表示を得たので、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第五八条第一項に基づき、当該提案を可決する旨の社員総会の決議があつたものとみなされた。

理事会議事録

一. 日時 二〇二三年六月六日(火)午後三時

二. 場所 東京プリンスホテル

東京都港区芝公園三―三―一

三. 議決権のある当法人理事総数 一三名

出席理事 九名

安孫子 正、池田 篤郎、宮崎 敏明、三田 芳裕、

松村 隆志、貞刈 厚仁、松田 和彦、糟谷 治男、

古井戸 秀夫、

欠席理事 四名

山根 成之、堤 雅史、葛西 聖司、曾田 修司

出席監事 二名

迫本 栄一、安藤 知史

事務局 二名

吉浦 高志、小金平 惠津子

四. 議長 会長 安孫子 正

五. 開会

定刻に至り、吉浦事務局長が本日の理事会は定款第三四条の定足数を満たし、適法に成した旨を告げた。議長は定款第三三条二により安孫子正会長が務めた。理事会議事録は一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第九五条三項の規定に従って作成することとなった。

六. 議事の経過の要領及び結果

【決議事項】

第一号議案 二〇二三年度事業報告承認について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二二年事業報告の説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第二号議案 二〇二三年度決算報告承認について

議長から本議案について付議し、これを受けて吉浦事務局長から二〇二二年決算報告の説明を行い、

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、

全員異議なく承認可決した。

第三号議案 二〇二三年度決議の省略の方法による社員総会招集について

議長から本議案について付議し、これを受けて

吉浦事務局長から二〇二三年度決議の省略の方法による社員総会招集についての説明を行った。

次いで、議長が本議案の承認を求めたところ、全員異議なく承認可決した。

次に会長より常務理事の業務執行体制の報告があり、池田常務理事、宮崎常務理事の業務執行確認と各常務理事の業務執行報告がなされた。山根常務理事は欠席の為、安孫子会長から報告があった。

次に事務局よりチケット不正転売禁止法の状況報告、JASRACとの規定改定協議の状況、協会発行観劇券の協力要請、劇場支配人を委員とする委員会の活動報告、文化芸術推進フォーラムの活動報告、アート&ライブシテイ構想実行委員会の活動報告を行った。

七. 閉会

議長は全議案の審議を終了した旨を告げ、午後三時四〇分閉会を宣した。

定時社員総会議事録

定時社員総会の決議があったものとみなされた日

二〇二三年六月二二日

定時社員総会の決議があったものとみなされた事項の提案者

代表理事 安孫子 正

議事録の作成に係る職務を行った代表理事及び

理事

代表理事 安孫子 正

理事 池田 篤郎

議決権を行使することのできる社員の総数

一四名

決議を省略する議案

第一号議案 二〇二二年度事業報告承認の件

第二号議案 二〇二二年度決算報告承認の件

第三号議案 理事の任期満了に伴う改選について

現理事一三名の内、下記四名を理事に再任する件

松村 隆志、古井戸 秀夫、葛西 聖司、曾田 修司

計四名

第四号議案 議事録署名人選任の件

代表理事 安孫子 正及び理事 池田 篤郎を議事

録署名人とする件

二〇二三年六月六日の理事会の決議に基づき、

代表理事 安孫子 正が社員全員に対して上記定時社員総会の目的である上記事項について提案書を発し、当該提案につき、二〇二三年六月二二日まで社員全員から書面により同意の意思表示を得たので、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第五八条第一項に基づき、当該提案を可決する旨の社員総会の決議があったものとみなされた。



公益社団法人日本演劇興行協会役員名簿 二〇二三年六月現在

会長	安孫子 正	株式会社歌舞伎座	代表取締役社長
常務理事	池田 篤郎	東宝株式会社	常務執行役員
常務理事	山根 成之	松竹株式会社	取締役副社長
常務理事	宮崎 敏明	株式会社御園座	代表取締役社長
理事	三田 芳裕	株式会社明治座	代表取締役社長
理事	松村 隆志	株式会社新歌舞伎座	代表取締役社長
理事	貞刈 厚仁	株式会社博多座	代表取締役社長
理事	松田 和彦	東宝株式会社	演劇担当付
理事	糟谷 治男	公益財団法人都民劇場	理事長
理事	堤 雅史	公益財団法人東京都歴史文化財団	副理事長
理事	葛西 聖司	独立行政法人日本伝統文化振興会	評議員
理事	古井戸秀夫	東京大学	名誉教授
理事	曾田 修司	跡見学園女子大学	副学長
監事	迫本 栄二	公認会計士	
監事	安藤 知史	弁護士	

加盟劇場			
歌舞伎座	松竹株式会社	☎〇三―三五四五―六八〇〇	
サンシャイン劇場	松竹株式会社	☎〇三―三九八七―五二八一	
新橋演舞場	松竹株式会社	☎〇三―三五四一―二六〇〇	
帝国劇場	東宝株式会社	☎〇三―三三二一―三七二二	
シアタークリエ	東宝株式会社	☎〇三―三五九一―二四〇〇	
明治座	株式会社明治座	☎〇三―三六六〇―三九三九	
御園座	株式会社御園座	☎〇五二―二二二一―八二〇一	
新歌舞伎座	株式会社新歌舞伎座	☎〇六―七七三〇―二二二一	
大阪松竹座	松竹株式会社	☎〇六―六二一四―二二二一	
南座	松竹株式会社	☎〇七五―五六一一―一五五	
博多座	株式会社博多座	☎〇九二―二六三一―五八五八	

編集後記

「関係者の体調不良で公演中止…」 こんな文言で始まる演劇関係のお詫び文。詮索しないようにと考えながらも詮索してしまう私がいいます。

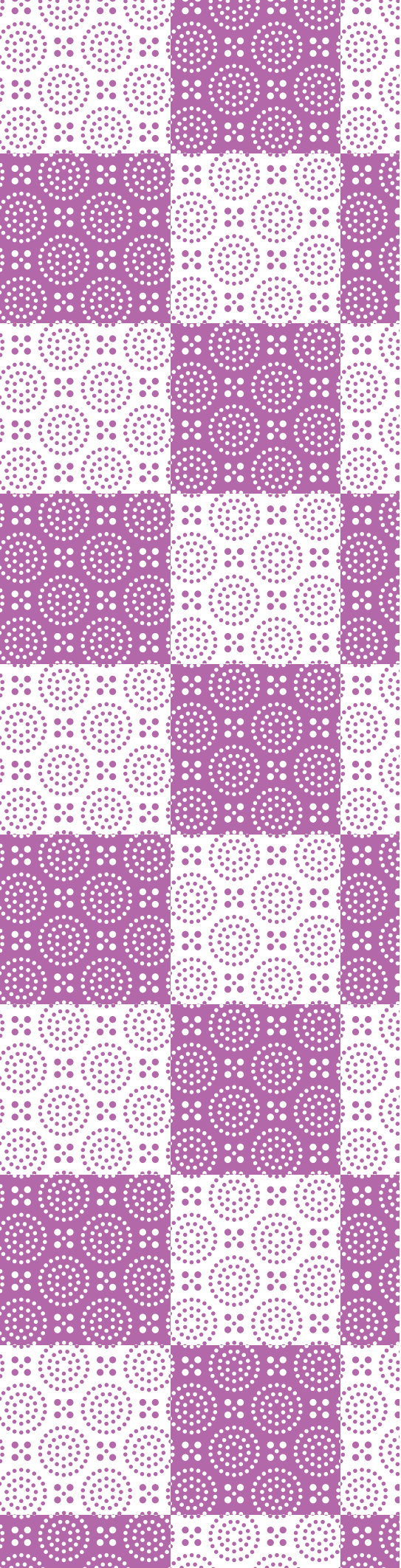
政府は、新型コロナウイルスを2類から5類に引き下げ、規制も支援も緩め、コロナ以前の動きになるよう方針を打ち出しているのだが、5類になったからといってウイルスが無くなるわけではない。多くのキャスト、スタッフが集う演劇集団に更なる試練が待ち受けている。演劇界にこのような言葉が無くなる日が一日でも早く来るよう祈念する今日この頃です。(Y)

取材・文	高橋 涼子(インタビュアー・理事・舞台人)
写真	阿多 亨(インタビュアー・理事・舞台人・助成金受賞者)
印刷	株式会社 宝円堂
編集・発行	公益社団法人 日本演劇興行協会
発行所	東京都中央区銀座一丁目二七―八セントラルビル
発行日	二〇二三年七月

不正転売禁止法

2019
6.14
施行

演劇、コンサートやスポーツなどのチケット（特定興行入場券）の不正転売、または不正転売を目的としてチケットを譲り受けた場合、**1年以下の懲役**、**100万円以下の罰金**、またはその両方が科せられます。



*Japan
Association
of Major
Theaters*